
風が吹けば桶屋が儲かる?

カガツミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風が吹けば桶屋が儲かる？

【NNコード】

N9130S

【作者名】 カガシミ

【あらすじ】

かなり昔の投稿したもの。実はポケモンがほとんど出てこない寓話

今日はテストが終わって数日後のテスト返しで教科は地理だ。すべての答えの確認と採点間違いの報告が終わってもまだ時間は二十分ほど余っていた。

「さて、皆。時間が思いつきり余った者でな、こじで質問なんだが……お前ら風が吹けば桶屋が儲かると言つ言葉を知つてゐるかい？」

「はい、知つてゐる人は挙手！」

この海老沼という名の教師。時間が余ったからと言つて地理の時間に国語か経済の授業でもやるつもりなのだろうか。

まあ、後者なら社会関係と言つ事であながち脱線もしていいだらう。

手を上げるのは、俺の他に数人だ。結構有名な話だけれど落語に興味がなれば知らない奴も多いだらう。

「まあ、こじのお話はな……大風で土ぼこりが立つと土ぼこりが目に入つて、盲人……つまり目の見えない人が増える。

当時、三味線は盲人がホウエン地方のオルドラン家物語なんか語ることで日銭を得るために……話しの合間にベベンッ……と弾くために三味線を買う必要があつたんだ。

しかし、その三味線にはエネコロロの革が必要でな。そのために何匹ものエネコロロが殺された。そして、エネコ・エネコロロが減ればラッタやカラッタが増え、それらは桶をかじる。

桶の需要が増え桶屋が儲かる……という話なんだ」
へえ、と如何にもつまらなそうな言葉だけが返つてくる。ま、当然だらう。みんなテストの結果に一喜一憂するのに忙しいのだから。

俺みたいに大体の教科が平均点より四点か五点上ならそれほど問題じゃないけれどな。

「なんだみんな。興味ないって顔だな……よし、それじゃあ本題だ……似たような話で地理の先生らしいお話をしてやるぞ。

よく聞け、寝るなよ、耳の穴かっぽじれ。これはとある砂漠の国の物語。あの、ミコウが初めて発見されたといわれる南アメリカのお話である……ベンツ」

三味線の音を口で言い表す海老沼先生。これでも海老沼先生のお話は面白いから、最後まで聞くきになるのがいつもの授業風景である。

昔々、とある砂漠の国がありました。その砂漠の国は毎日のようにサンサンと晴れています。その原因となるのが、グラードンというその国に神話として伝わるポケモンでした。

溶岩のように赤い体色に、といひどいろ火山のようないろいろのラインが走り、その腕にはアンノーン文字でマグマを象徴するMの字のラインが刻み込まれている。

前屈みな上半身を支えるような尻尾は案外短いが、肉厚で幅の広いそれは巨体を支えるに十分足るものだ。

大人の身長の倍以上あらうかと言つその巨体が吼えるとともに、周囲の天候は日照りとなる。

誰かが言つた。雨が降らないのはこのポケモンせいであると。そして、その言葉はどんどんと広がつていき……やがては大合唱のように不満は募る。

雨が降らないのはグラードンのせいだあ！

野菜が不作なのはグラードンのせいだあ！

地震で建物が崩れるのもグラードンのせいだあ！

俺が結婚できぬのもグラードンのせいだあ！

あることないこと、叫ばれて、ついにはグラードンを討伐すると
いう者まで現れ始めた。国の勇者は当時一般的な武器とされてきた
弓と槍を取り、数人で力を合わせてグラードンを撃退した。

「お前ら、後悔するからなあ！」

グラードンは去り際そんなことを言いながら砂漠を出て行つたが、
国の民衆たちはそんなことを何ら気にせず平和に暮らしました。
と、そんなところで話が平和に終わるはずもない。

国には雨が以前よりも降らなくなり、オアシスも枯れて人々の生
活はさらに厳しいものとなつてしまつたのだ。今までの『雲一つ無
い晴天』が『雲が数個ある晴天』に変わつただけで、雨はむしろ少
ないという煮え切らない結果である。

グラードンの呪いなのか何なのか、国では原因が分からぬあま
り、雨がさらに降らなくなつたのは勇者のせいであるといつ結論に
まで達しそうになる。

グラードンは勇者に對して怒つておられるのだ。

勇者達を血祭りに上げろ！

もちろん、『まあまあ冷静に』といつ声も多かつたが、作物が栽培出来ないことで食糧不足による餓死者が例年の倍以上となつては
流石に抑えきれない。

仕方がないから勇者たちは雨を降らすという力を持つ伝説のポケ
モン、カイオーガを呼び寄せて雨を降らそうといつ結論に達した。

そうして、苦労の果てにカイオーガを砂漠の国の海岸に招き、雨を降らすように頼んだ。

そのカイオーガの力はすさまじく、頼めばいつでも雨が降る。

「ああ、カイオーガ様ありがとうございます。これからは雨が必要となつた時は、貴方のために祭りを開いて歓迎します故、これからもこの海辺を泳いで居てくださいませ」

砂漠の国を代表する王は言った。

「ああ、だけれど国を治める者がそんなに自分勝手でええのかい？」
カイオーガは、そう言ったが、意味が分からず王は首を振る。

「いや、これは国の総意であるから」

「そうして、この国はこつでも好きな時に雨が降る国となつた……あくまでこの国は。」

反面、隣国では全く雨が降らなくなつてしまつたといふ。

「はい、ここでお勉強だ。この世界にはポケモンの力に頼らずとも雨を降らす方法があるのだが……みんなはどうすればいいと思う？」

「はい、そのー！」

空に愛をばら撒いて、その熱いLOVEパワーで雨を降らせる。

「そのー！」

空に友情を……以下略

「その三ー！」

空に悲しみをばら撒いて、涙雨を降らせる

「その四ー！」

空に怒りをばら撒いて、台風を起こす。

「はいみんな、どれだかわかつた奴は挙手！」

俺は思わず笑ってしまった。これでも俺は雑学知識だけは無駄に多いんだと、誰もが挙手しない中で俺だけが手を上げる。

「お、よーし桜井。答えてみる、何番だ？」

「一番……特に年齢の高い熟年の愛のほうが雨もよく降ると思います」

ほほう、と海老沼先生は感心したように頷く。

「だいぶ賢い奴がいるなあ、このクラスは。そうだ、空に愛をばら撒くと雨が降る……と言つても、ただの愛じゃダメなんだ。

実は愛つて言つのはな……でんぶんを紫にしたり、うがい薬に使つたりするヨウ素の元素記号『I』のことであり……こいつを銀と化合させて作ったヨウ化銀というモノをばら撒くと、それが雨の核となつて雲が発生するために雨降らすんだ。

ちなみに、桜井が年齢の高い熟年と言つたのはな……年齢のことを英語で『Age』と言い、銀の元素記号が『Ag』だからだ。そうだな？」

「ん、まあそういう事です」

当たり障りのない返答をしながら、俺は注目されることに微妙に照れていた。

「他にもドライアイスを空中にばら撒く」と同じようなことが出来るという事も覚えておけ。得はあんまりないだろうけれど、覚えておいて損はないだろっから」「

ぱつりぱつり、笑いのツボの弱い奴らから失笑が漏れた。俺も少しおかしい。海老沼先生の授業はこれだから人気がある。

「さて、ここでお話に戻るぞ。ホウエン地方ではお天気居研究所カイオーガがどのように雨を降らせるのかの、メカニズムを研究してはいるが、まだに明らかになっていない。

だが、重要なのはそこでは無い。興味深いのは田ウ化銀を使った時と同じ症状になつたという事はこの伝説に伝わっているという事だ。

田ウ化銀で雨を降らせると偏西風で運ばれていくはずの湿った空気が、そこですべて乾燥してしまつんだ。つまり、そこから東は雨が降らなくなる。

逆にそれを利用して、オリンピックの前日に雨を降らせて乾燥させるなんて言つのは記憶に新しいな？

さて、このお話では、続々に雨をめぐつて戦争まで起きそうになつてしまい、いつしか誰かが『カイオーガに次々移動して雨を降らせてもらえばいいんだ』と言つようになつたんだ。

だが……カイオーガは勘弁してくれ、ワシはもう旅なんてせず一つの場所でのんびりしたいんじや。それにそんなことやつたらキリがなくつて、結局大陸の端から端までいかにやらんじやろ？』
と言つたんだ。

つまり、木村王国が潤うと児玉王国が乾燥する。児玉王国を何か潤わせると坂田王国、坂田王国の次は桜井王国。ああ、腕が疲れ、キリがない』

右から一番目の机の列に座る生徒の頭上で、指を広げたまま素早く手を上下させることで雨が振つているようなジェスチャーをされる。それで、腕が疲れるのだろう。

何故か俺を含むその列の生徒は国の王様にされてしまい、クラスの所々で吹き出してしまつ海老沼先生の授業のいつものパターンに入っている。

「ま、これはそう。我田引水つてことわざと似てゐるな……これを
どうやって解決したのか？ 続きが始まり始まり～」

「一か所で定住したいかあ……それじゃあいつたいどうすれば」
結局、カイオーガにそれ以上頼むことも出来ず、王様は途方に暮
れていた。するとカイオーガは言う。

「この国が砂漠になる原因はのう……北の地方からここに寒流が流
れ込んであるせいなんじや。こんな冷たい水じや雨がなかなか蒸発
せんでのひ……ま、この海流をどうにか出来る者があるとすればル
ギアの若造くらいかの。ほつほ

なるほどそれだ。と、グラードンを撃退したり、カイオーガを招
き入れた勇者たちに王様は頼んだ。勇者もなんだか半ば自棄になつ
て旅に出て、苦労の末にルギアのいる中央アメリカにまで到達した。

しかし、ルギアは言ひののだ。

「出来るには出来る……だが、それをやつてしまつと、住む魚、回
遊する魚そう言つた者がすべて変わるとともに、他国との交易船の
行き来に使う潮の流れを変えてしまえば貿易にも支障が出るだろう。
例えば、難破したり遭難したり、目的的に正しくたどり着けなか
つたりで貿易が滞つてしまえば……工芸品との取引で穀物を輸入し
ている国なら大打撃を受けるだろ。

それに、海に住むポケモンを含む生物にどのような影響が出るか
も分からん。そんな危なつかしいことは出来ない」
ルギアはそう言つて、勇者達を突っぱねる。

勇者は早速ここのことを王様に相談した。実は王様、特に大臣諸侯

たちに相談することもなく勇者を派遣していたので、事の重大性を理解していなかつた。

ルギアに言われたことを、王様が皆に伝えると漁師を始めとする船乗りの総好かんをくらひ、王様はルギアに頼るといつ手までも封じられてしまつた。

ほとほと困つてしまつた王様やその国の学者達は、雨を降らせるにはどうすればいいのかと考えに考えた末、結局何も思いつかばない。

結局のところルギアに良い案がないかと、相談持ちかけることにしたわけで、今度は勇者たちに頼るだけでなく、学者も一緒になつて食料を多く持ち、長い間語り合える準備を万全にしている。

そんな語り合いの中でもまず最初にルギアが出した案は、神の力に頼ることなく自身で出来ることを最初にやつてみるとこの事であつた。

「だが、まあ。その神の力の恩恵に頼りたくなる気持ちもよく分かる。だから私はお前たちの願いを一度だけかなえよう。

だが、神が手を貸すのは一度きりだとすれば、どんな頼みをすれば良いか、自分で考えてみるとよい。

そして、もうひとつ。自然を司る者の力を敬うがよい。自然をつかさどる者の力は偉大にして尊いものだ。グラードンは砂漠に邪魔な神では無いと、心に刻め、話はそれからだ」

そう言つてルギアはひとまず王様たちを、国へと返した。

国へと帰る帰路の途中、グラードンの捨て台詞として皆が一笑に付した言葉を思い出す。

『お前ら後悔するからなあ！』

粗暴で、幼稚な言葉遣いなだけにあまり尊敬は得られなかつたけれど、グラードンはこのことが分かつっていたのだろうか。

長丁場の話し合いになることを想定して船に積みこんだ食料は、そのままグラードンへの供物として差し出された。

「教えてくれ、グラードン」

王様は跪きながらグラードンへと尋ねる。

「何ゆえに、貴方がいなくなることでの國は余計に水不足に苦しむことになつたのだ？」

大きい体のせいか、非常にゆつくりとした動作でグラードンは顔をあげ、語り始めた。

「太陽の力なくしては温度の変化は起きない。それは即ち風は起きてないという事だ。無論のこと、俺に太陽をどうこうする力はないが……陸地へ強い日差しを届けるように、海へ強い日差しを届けて空気を暖めることもある。

お前らがカイオーガに頼んで雨を降らせた時、それより東は雨が降らなかつたのであるう？ 同様に、寒流の手前の海上でばかり雨が降つていたらどうなる？

ここには雨が降らないという事になる。で、あるが故に……私は海底火山を通じて孤島に赴き、そこの火山にて噴煙を上げる。その噴煙を雨の核にして、この地に雨をもたらすのだ。

その海底火山の入り口となるのが、この国なのだ

グラードンはそこまで言つて、辛抱しきれなくなつたのか、供物に手を付け始める。

「むぐつ……う、うん……それをお前らはな、俺が晴れを呼ぶからなどと言つ理由で、雨を降らせない天敵だとか言つて、排斥するの

だからな。

さらに言えば、俺がいなくなれば地脈の流れだっておかしくなる。そうなれば、今まで流れていた水脈に水が来なくなり、地下に掘りたてた水路であるカナートやカレーズといった場所にさえも水が来なくなるか、もしくはあふれるのか……それは悪戯な神のみぞ知るところだ。

後悔すると言つたのは……そういう意味だ」

言いきつてから、グラードンは再び供物に手をつける。食事の風景は野性味があふれていて神の威厳には乏しく、そこら辺にはびこるバンギラスやボスゴドラと言つたポケモンを巨大化したようにしか見えない。

今度は供物をすべて食べきるまで止まらず、食べきつた後で口の周りを拭い、爪についた食べカスまで舐めとつてから、大きなげっぷをして再び語りだす。

「この世界の天候は非常に微妙なバランスで司られているのだ。確かに俺がいなくなることでプラスに働く可能性も無きにしも非ずだが、それに賭けるのはあまりにも馬鹿げた行為だ。

どうやら俺を追いだした奴らは勇者とたたえられているそうだが、それは飛んだ愚か者どもだな」

フンッと大きく鼻息を鳴らし、グラードンは嘲るように吐き捨てた。そして最後は神らしく厳かな口調で、

「無知とは、積極的に行動する者にとつては罪なものだ。人間は最も考える生物故に我らポケモン以上に栄えたのだ。

考えることを忘れた人間は……劣る。この地上のどんな生物よりもな」

最後に、それだけ付け加えて。グラードンは息をついた。

「それで、どうするのだ？ 私を砂漠へ再び呼び寄せるか？」

しばらく考えて、王様は言った。

「やうしょうと思つ。私は、今まで田先のことばかりに捕われていた。貴方が戻ることで、巡り巡つてそれが雨となるならば……グラン、よ、今一度我らの国で大地と田差しを司つてはくれないか？」
グラードンは再びフンッと大きく鼻を鳴らし、尊大な口調で人間へ問いかける。

「俺を敬つ覚悟はあるか？」

王様は、首を縦に振る。

「いいだろ。では、雨が降れば俺への供物をさげるがいい。それが条件だ」

言つなり、グラードンはそのままでゆっくつ歩を進める。

「今日のようにつまいまのを期待しているぞ」

最後に笑つて見せた顔は、取つて食われるとしても思つよつna鋭い牙が並ぶ笑みだったが、人間が自分を理解してくれたことに対する喜びも含まれているようだつた。

もしくは、ただ単に美味しいものが食えることに喜んでいるだけかもしけれない。

また月日が経つて、再びルギアの元へ王様は訪れた。

「なるほど、グラードンを再び呼び戻したか……それでよい。一つのバランスが崩れされば世界は思わぬところから瓦解するものだ……」

眼を瞑りながらしみじみと語っていたルギアは、そこから先を深海のように深い瞳で人間へと問つ。

「して、人間よ我らに望むことは決まつたか？」

王様は、これまでに話し合つた結果出た結論をルギアへと答える。

「私達に種をくれ。乾燥した土地でも強く強く育つ種を」

「よいだろう……確かに砂漠で水分を不足して死ぬことは多いが、食料不足による餓死や衰弱から来る病死も多いものだ。しばし待つていろ……」

私が条件に見合う植物を運んでこよひ。そなたちは、先に故郷へ戻つていくとよい……」

王様たちが領いて自分たちの国へと帰るゝとするとき、ルギアは銀色の翼をはためかせながら真南へと向かつて言つた。

「と、この伝説ではルギアは中央アメリカに住んでいと言つたが……みんな、この作物が何か分かるか？ ルギアは南アメリカの中央に向かつて行つたんだ。

この答えがわかつたら地理の成績で『5』も取るのも夢じやないぞお！」

海老沼先生はそう言つて見せたものの、誰も分かるものはいなかつた。

「まあ、まだ習つていないとこだけに仕方がないか。正解はキサバの実だ。この伝説のポケモンがてんこ盛りかつ喋りっぱなしなお話の真偽は、定かではないが……今でも、巨大なポケモンの糞の跡から、キサバの野生種が生えて來たという報告がある。

それが成分分析の結果、ルギアの糞だという事も考えれば伝説もあながち間違いないんじやないかと、そういう話だ。

今ではその作物は国での主食の一つだよ」

『主食はうんこから出来た植物かよ』とか、一部の下品な男子が臆面なく、大声でそんなことを口にする。女子たちは『やだ、そう言つ事言わないでよ』と返す声がちらほらと。

「ひらひら、なんてことを言つんだ？ そんなこと言つたら、夏に美味しい大豆だって女性の尻から生まれたものだぞ。

それに、ルギアの糞ならきっといい肥料になるだろ？

半分が笑つて、半分が引いていた。まあ、大豆がそんなものだと思つと少々『うえつ』となるのは仕方がない。俺は笑つた派だけれどね。

「つまりな……」この話で俺が伝えたかったことは風が吹けば桶屋が儲かるとは言つが、グラードンがいなくなると砂漠が滅ぶし、カイオーガに雨を降らせると戦争が起るんだ。

このように、人の世は何がプラスになるか、マイナスになるかはわからない……このお話ではルギアがその恐ろしさを指摘しているな？

それはお前らもだ。今の中学生という時期いろいろ経験しておけ。若い頃の苦労は買ってでもしろと言うが、今覚えておいた物事、技能が将来どんな風に役立つかはわからん。

ひょっとすれば、ルギアのように台風を巻き起こことだつてできるかもしれないぞ」

そんなことは流石に無理だろ？ うう思ってながら俺は時計を見る。まだあと五分ほど残っている

「さあ、残りは時間が許す限り、この昔話に関する地理的な解説をいろいろするからな。寝るなよ？」

海老沼先生はそんなことを言いながら、地理らしい授業を始める。今回のお話に出てきた砂漠の国は海岸砂漠と呼ばれる寒流を起因とする砂漠だとか、気候区分がどうたらとか。

真面目な授業モードになると、やはりほかの教師と同じく面白くない授業ではあるが、今日のお話は面白かったし、皆が笑うところを聞き逃したくないから俺は起きてまじめに授業を受けることがあります。

もしかしたら、このお話で覚えたことが人生を左右することがあるかもしれないね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9130s/>

風が吹けば桶屋が儲かる？

2011年10月6日14時22分発行